

ラテンアメリカ都市物語

＝第21回＝

驚異の経済成長が続く ジョージタウン

伊藤 みちる

2006年4月、筆者の夫がガイアナの首都ジョージタウンにJICA 専門家として赴任した。当時、筆者は英国のカリブ海地域研究所に所属し、タイミングよく、飛行機で50分しか離れていないトリニダード・トバゴでフィールドワークをしていた。長期滞在用住居を一緒に探そうとの夫の誘いを、南米大陸に位置する「カリブ海地域」であるガイアナに行けることが嬉しくて、快諾した。今思えば、その時の夫の誘いは、筆者がジョージタウンで「駐妻」になれるかどうかを、彼なりに判断する目的があったのだろう。

2006年11月、筆者が選んだ家に住む夫とジョージタウン生活を始めた。24時間体制で警備員を雇う各国外交官のみが住む地区に建つ、鋭い有刺鉄線がうず高く何重にも外壁に設置された、招待客100名の結婚披露宴も可能な大きさの家だ。それでも不動産屋から紹介された家の中で、最も家賃が安く、最も小さい家だった。電気は頻繁に止まり、褐色の水道水も頻繁に止まる、常にキャンプをしている感覚の生活だった。



スタブローック市場の時計台はジョージタウンのランドマーク的存在
(出所：Guyana Marriott Hotel GeorgetownのWebサイトより)

筆者のガイアナ在留邦人としての初めての生活は、約1年続いた。ジョージタウン初の信号設置工事を見守る人々が車道を占拠したことによる大渋滞、その大切な信号が設置翌日に盗難にあって嘆く人々、ジョージタウン初のエスカレーター運行開始の瞬間、そのエスカレーターに乗るための行列に加わる人々の高揚感、エスカレーターからの降り方が分からなくて雪崩のように転びながら落ちてきても楽しそうな笑顔の人々、幅と高さが不揃いで上るのも下るのも難しいショッピングモールの階段、軽トラの後ろに屠殺したばかりの牛を載せラッパを吹きながら住宅地を回る肉屋など、毎日が驚きの連続だった。

以降も、短期訪問は数えきれないほど、また2011年7月から2年間は、筆者自身が国連機関に所属して再びガイアナ在留邦人となった。本稿は、筆者の知見と、ガイアナ人32人とガイアナ在住日本人1人から聞き取った最近の情勢をもとに執筆した。

ジョージタウンの概要

国連推定のガイアナの人口は78万人で、首都ジョージタウンには、その8割の推定62万人が住む。ジャングルやサバンナ、川や滝で国境を接するベネズエラ、スリナム、ブラジルからの不法滞在者も多く住むため、人口は推定でしかない。ガイアナの住民については、かつてサトウキビのプランテーションの重要な労働力だったインド系とアフリカ系の軋轢が多く報じられるが、ジョージタウンには彼ら以外にも、先住民や中国、ラテンアメリカや欧州、それぞれの混血など、さまざまなガイアナ人がいる。

大西洋からジョージタウンを守るのは450km 続く

堤防「シー・ウォール」だ。1855年には、シー・ウォールが決壊し、大洪水が当時の総督邸を流し去った記録が存在するが、現在も大潮の満潮時には、東映映画オープニングのように、波飛沫をあげて海水が勢いよく流入してくる。シー・ウォールは生命線であり、なければ大西洋の荒波に侵食されてジョージタウンは存在しえなかった。

碁盤の目のように水路がめぐる街づくりはオランダが行った。60年前の水路は常に循環しており、小さな魚が住む水路を歩いて学校に通っていたとお年寄り話す。しかし、現在は急速かつ無計画な開発が進み、一部の水路は潰されてしまい、水は淀み悪臭を放っている。特に雨が多い5月から8月にかけて大雨と大潮が重なると、排水機能が追いつかず、洪水となる。3～4月のイースター時期は貿易風が強く吹き、日没以降は肌寒いが、風揚げのベストシーズンとなる。一年を通じて高温多湿で、高額になる電気代を気にしてエアコンを運転させないと、スーツや靴など、すべてのものに必ずカビが生える。

ジョージタウンの治安

日本のバラエティ TV 番組によると、ジョージタウンの治安は南米最悪だという。今まで筆者自身が経験した被害は、公式行事で乾杯のために手渡された飲み

物に薬物が混入されていただけだ。しかしスリ・路上強盗は日常茶飯事だ。ラテンアメリカ6か国の軍・警察関係者6名が制服姿で観光名所スタブクロック市場へ視察に行き、5名がパスポート、5名が時計、4名がスマホを掏られた話は有名だ。たとえ歩いた方が便利でも、常に車で移動する。サービス利用後に強盗に遭う確率が高い、特定のタクシー会社は利用を避ける。現政権に交代後、特に郊外でアフリカ系とインド系の対立が悪化しているため、どちらかの肩を持つ発言は控えた方がいい。また短期出張者や単身駐在者を狙った、飲み物への薬物混入強盗事件が多発している。

ジョージタウンの観光

おそらく多くの短期出張者には「何もない」判定をされてしまうだろう。筆者は、日本のギアナ3国周遊ツアー参加者たちに「何もないところで頑張ってる」と飴玉をいただき、日本のバックパッカーの若者に「こんな何もないところで何してんすか?」と聞かれたこともある。ガイアナ自体は秘境として欧米で脚光を浴びているが、観光客の目的はガイアナ奥地の自然や動物であって、たしかにジョージタウンは素通りされる。しかし、ジョージタウンにも心躍るものは存在する。

宗主国の英国にとって重要な植民都市であったジョージタウンで当時の繁栄の跡を探すのは楽しい。現地では世界最古で世界最大の木造建築と説明される、1899年完成、高さ43.5mのセントジョージ英国国教会大聖堂や、数々の美しいジョージアン様式の木造建築物はシティーツアーの定番だ。法隆寺や東大寺、東寺の五重塔の話は喜ばれない。ガイアナが一時、社会主義国になったときに設置された、東ドイツ製やロシア製のマンホールの写真を満足げに撮影していたヨーロッパの観光客に出会ったこともある。人の関心はそれぞれだ。

動物が好きな方は、動物園や国立公園に住むマナティに餌をやることもできる。釣りが好きな方は、黄金のナマズや甲冑を着たような魚など図鑑でしか見たことがない魚が、普通に食べ物として売られている魚市場に行くとき心躍るだろう。お酒が好きな方は、ラム酒の工場見学に行くと心も体も躍り踊る。ガイアナ産のダイヤモンドとゴールドでオリジナルのアクセサリを作るのも素敵だ。ジョージタウンから車で30分も行けば、サトウキビ畑の中に9ホールのゴルフ場もある。サトウキビ畑の様子が色濃く残るコースで、灌漑用クリークがそこらに残っており、ボールが見事



干潮時には100m以上干潟が続く（撮影：Steve Douglas）



満潮時には高波が押し寄せる（出所：“Kaieteur News Online”より）

に頻繁になくなる。そしてワニが住処としているため、ロストボールは探せない。

ジョージタウンの食べ物

2008年、フェリーで渡る以外に方法がなかったパービス川に橋がかかったことによって、ガイアナ東部やスリナムへの陸路が安定した。また2009年、小舟で渡るしか方法がなかったブラジルのボンフィンとガイアナのレセムの間を流れるタクツ川に橋が架かったおかげで、ブラジルへの陸路が完成した。この二つの橋のおかげで、ジョージタウンの輸入物資供給は安定し、「陸の孤島」感が軽減した。また外食の選択肢が乏しかったジョージタウンに、比較的カジュアルに楽しめるブラジル料理の代表格「シュラスコ」専門店ができて、ブラジル Skol の生ビールが飲めようになったのは画期的だった。

果物はとにかく豊富で安くて美味しい。汽水域で獲れる各種エビは中華料理かカレーでぜひ食べて欲しい。先住民料理由来のペッパーポットや、煎餅のようなキャッサバ・ブレッドもガイアナ産ピーナツバターをつけて食べると特に美味だ。ガイアナ国民食は中華の焼きそば「チョウメン」だ。ポルトガル料理由来の

ガーリック・ポークは地元密着型の店ほど美味しい。豆の炊き込みごはんはラテンアメリカ各地に存在するが、特に肉体労働者が集う食堂のクックアップ・ライスは絶品だ。旧英国植民地の食は残念なことが多いが、多民族が暮らすガイアナの食べ物はとにかく美味しい。

今ではガイアナ Banks の生ビールも飲めるようになった。おしゃれなワインバーやかわいいカクテルを出すバーもできたが、ジョージタウンで飲むべきはガイアナが誇るラム酒である。ぜひ大西洋の風に吹かれながら極上のラム酒をストレートかロックで味わっていただきたい。

ジョージタウンのお土産

ガイアナを代表するラム酒「エルドラド」の25年ものをお勧めする。日本未入荷の「ロイヤル」も良い。お財布と相談の上、熟成年数をお選び頂きたい。欧米では高級石鹸として販売されている、洗い上がりすっきりしっとり、アトピーや不安定な肌を落ち着かせるクラブウッドオイル石鹸もお勧めだ。魚鱗や木の実のアクセサリーも可愛い。

近年のジョージタウン

昨今、ガイアナは石油ブームと言われる。2015年5月、エクソンモービル社がガイアナ沖200km地点に大規模なオフショア油層を発見し、2019年12月に商業生産を始めた。その後もガイアナには次々と油田が発見され、原油産出量が減り続ける近隣トリニダード・トバゴの日産バレル数と比較し、10倍以上の生産が可能となることがわかった。2019年、IMFは2020年にガイアナが石油関連産業に牽引され、約86%の世界最高の経済成長率を遂げると予測した。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大を受け、約43%に



セントジョージ英国国教会大聖堂（執筆者撮影）



草で水面を叩くとマナティーが寄ってくる（執筆者撮影）



ジョージタウン中心部
（出所：Guyana Marriott Hotel Georgetown の Web サイトより）

下方修正されたが、それでも驚異的な成長予測だ。

近年のジョージタウンでは、より賃金の安いベネズエラ人が中心となり建設工事が至る所で行われ、Marriott に続き Hyatt や Hilton など外資ホテルの建設計画もある。空き地が減り、5階以上の高層ビルが増え続けている。外国人が増えたが、欧米育ちのガイアナ人も絶好の投資機会とばかりに戻ってきている。ガイアナ人のうち約40%がガイアナ国外に住み、その多くが高等教育を受けていることを考慮すると、今後も舞い戻り移住の流れは続く。就業機会を求めて欧米移住していたガイアナ大学卒業生などの頭脳流出は減速する。しかし、建設資材は高騰し、家賃もさらに高騰し、物価も上がるが、給料は上がらず、一般の人々の生活に石油ブームの恩恵はまだ届いていない。

筆者のガイアナの知人・友人は、この石油ブームを非常に冷めた目で見ている。手放しで喜んでいる者は誰一人としていない。経済成長と貧困脱却を謳う華々しい報道とは反対だ。確かに長い目で見ればガイアナの国力の底上げになる可能性もあるが、石油セクターの発展が教育・医療・ガバナンスなどの発展につながらない限り、貧富の差が拡大し、さらなる治安の悪化を招き、国として荒廃していくだろう。1970年代から続いた徹底的な頭脳流出を経験した現在のガイアナ国内には、石油関連産業開発の知見を持つ国民はおらず、外資のビジネス機会独占が続いている。トリニダード・トバゴ初代首相エリック・ウィリアムズが自国の石油・ガス産業について、砂糖が石油に代わっただけで、新たな欧米の植民地主義に侵されていると指摘したように、ガイアナにおいても、植民地時代が繰り返され搾取されるだけだと半ば諦め気味である知識層は少なくない。

とはいえ、彼らもガイアナへの投資の機が熟したことは同意している。約4年前から、特に英語圏カリブ海地域で活動する、いわゆるロビイストやフィクサーと呼ばれる者たちが、トリニダード・トバゴに見

切りをつけ、潤沢な金が回っているジョージタウンに活動の拠点を移し始めていた。そして筆者が知るだけで、そのうち何人もがジョージタウンに家を買って家族と共に定住し、このコロナ禍でも忙しそうである。外国人が長期滞在できるインフラは整い、さまざまな力技を用いれば比較的自由が利く投資環境と文化は伝統的に根強く存在しているため、本格的な投資を受け入れるガイアナの準備は万端だ。

筆者は、2021年6月、ガイアナ大学で開催される研究学会で発表するため、ジョージタウンに渡航予定だった。会すべき人、食べるべき物のリストも作成済みであったのに、コロナ禍のためオンライン開催となり残念だ。フィールドワークのため、1年に2回はトリニダードやバルバドス、ジャマイカに渡航するが、2016年以降はあと一歩のジョージタウンに足を踏み入れていない。就航する航空会社が増え、格段に渡航しやすくなったジョージタウンで、おなかいっぱいクックアップ・ライスを食べることを夢見ながら、新型コロナウイルス感染症の収束を祈るばかりだ。

<付記>

国名「ガイアナ」は先住民の言葉「ギアナ（水が豊富な土地）」から派生した。ギアナ地方は、生物多様性と豊富な天然鉱物を誇る先カンブリア代の岩層であるギアナ・シールドの北西部に位置し、1498年のコロンブス第3回航海で目視が記録されている。16世紀にはエルドラド黄金伝説がヨーロッパを惹きつけたが、先住民との交易拠点として植民地の設営に成功したのは、オランダが初めてであった。その後、砂糖プランテーションに適したギアナ地方は何度も領有権が争われ、1814年のナポレオン戦争後、仏・蘭・英に分割された。1831年に蘭領の一部、エセキボ・バービス・デメララ各植民地が英領ギアナとして統一された後、1966年に英国から「ガイアナ」として独立した。現在のガイアナの首都は、かつての仏領ロンシャンが、蘭領スタブロークになり、英領となった後、英国王ジョージ3世にちなんでジョージタウンとして改名され、今に至っている。

(いとう みちる 大妻女子大学国際センター准教授)



郊外の住宅街からジョージタウン中心部へ続く道の拡張工事は至る所で行われている (撮影: Steve Douglas)